

発表タイトル	近海カツオ漁における海を歩く知識
発表者所属名	比較文化学専攻
発表者氏名	吉村 健司

漁場認識に関わる研究は、水産地理学、生態人類学、日本民俗学といった分野でなされてきた。これらの研究の特徴は、沿岸部で行われていることが挙げられる。また、漁場認識のあり方は、空間的側面、時間的側面、生物学的側面に分類し、説明されてきた。これらの研究の特徴として、沿岸部に（結果として）限定されてしまっているのは、非常に残念な点である。あたかも外洋には漁場認識が見られないような印象を持ちかねない。では、実際のところ外洋には漁場認識は見られないのか。結果から述べれば、漁師は外洋でも巧みに漁場を使い分け、漁撈を行ってきた。海図上のソネもしくは礁と呼ばれる、海底岩礁地帯には様々な名称が見られる。ソネの名称は、その一体の特徴を表すものも少なくない。すなわち、そこには漁師の、その海に対する知識が込められているのである。

本発表では、外洋を主漁場とするカツオ漁において、漁師はいかに海を歩いてきたのか。カツオ漁におけるソネ漁場の使い分けを事例に、外洋での漁場認識について紹介する。カツオ漁においては既存研究のように空間的、時間的な認識のもとでの漁場の使い分けが存在している。特に時間的な認識によるものが顕著である。具体的には年周性、月周性、日周性の3つによるものである。また、空間的には漁場におけるカツオ群の滞留の特徴から、すなわち生物学的側面との関係から使い分けしている。本部町のカツオ漁におけるソネ漁場として、もっとも重要なのが時間的な認識のもとで利用される5か所の漁場である。これらの漁場は、一日の操業のなかで単独で操業が完結することがある漁場である。一方で、空間的、生物学的な認識のもとで利用される漁場については、6か所の漁場があり、これらの漁場は単独で操業が完結することがほとんどなく、漁場としての重要性は決して高いものではない。しかし、船団運営上、重要なものとして位置づけられる。これらの漁場は、5漁場が不漁であった場合の「ついで」に利用されることが多い漁場、また不漁続きの際に「ダイバン」と呼ばれる大型のカツオを狙う時に利用される漁場である。すなわち、不漁の際のリスク回避機能が込められた漁場と換言できる。

ところで、現在の沖縄県のカツオ漁はパヤオとよばれる人工浮魚礁での操業が中心である。パヤオが沖縄に登場したのが1982年のことである。その後、全県的に普及した。本部町でも1983年から導入されており、その目的は「カツオ漁の振興のため」とされる。しかし、当初、本部町のカツオ漁師は、パヤオの導入に必ずしも賛成であったわけではない。それは、ソネ漁場に対する、一連の漁場認識があったために、パヤオが導入されることで漁場選択に迷いが生じかねないという理由からである。パヤオが導入されてから、ソネ漁場におけるカツオ群の滞留に変化が生じ、パヤオ利用に移行せざるを得なくなったが、それでもソネを使い続けたのは、「ソネ対する未練」があったためだという。